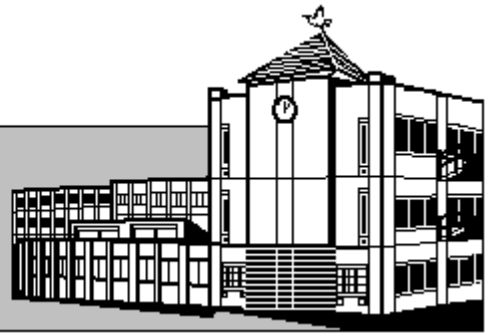


図書館だより



1998年12月 第7号 (クリスマス号)

編集・発行 敬和学園大学図書館

読書随想

内村の文庫本

永野 茂洋

1956年(昭和31年)という今からもう42年前になるが、この年に『内村鑑三著作集』(全21巻、岩波書店、1953年)のなかから宗教と文学、あるいは宗教と自然に関する文章を抜き出して一冊に編集した、内村鑑三著『宗教と文学』という文庫本が新潮社から出版された。廉価な普及版であるから、本自体に価値があるとか、それが出版界の一大事件であったとかいうことは一切ない。既に長いこと絶版になっていて、再版されたという話も聞かないから、出版界ではとうにこの本の役割は終わったと判断されているに相違ない。

今、私の手許にある版も古本であるが、しかしこれには特別の愛着がある。学部の学生であった時に、ある先輩が聖書の勉強をするなら、内村にこういう文章があるよと言って、自分の手持ちの一冊を譲ってくれたのである。その後しばらくして、私も遅ればせながら、『内村鑑三信仰著作全集』(全25巻、教文館、1961年)や『内村鑑三聖書注解全集』(全17巻、教文館、1960年)そして岩波の『内村鑑三全集』(全40巻、1983年)をひもとくことになったのだが、そのきっかけを与えてくれた、いわば私にとっての「内村鑑三入門」が、この文庫本であった。

日本の文学者の多くは、明治以来、西洋文明の根底にある宗教の問題、神信仰の問題と正面から対決して、肯定するにせよ、否定するにせよ、その苦闘のプロセスを表現にもたらずということを見てきた。そのような文学風土のなかにあつて、内村鑑三は文学の問題をはっきりと宗教の問題、信仰の問題だと見定め、その観点から文学全般について論じた稀有な論客の一人であった。この文庫本は正にその点に焦点を絞って編集されており、明治28年の「何ゆえに大文学は出でざるか」から、大正9年の講演筆記「モーセの十誡」に到る全部で16本の短文を収める。わずか200頁余りの文庫本ながら、編集方針の非常に鮮明な、そして文章の選択眼のよさが光る貴重な一冊であった。

なぜ日本には大文学が生まれえないのか。内村はこう答えている。「大文学なきのみならず、中文学なし、小文学なし」と。「然り、もし文学とは思惟の創作を言うならば、今日の日本に文学ありと言うを得るか」と。あるいは、「文学とは高尚なる理想の産なり、(中略)ゆえに理想なきところには文学はあらざるなり」と。あるいはまたこうも言う。「吾人は然か言う。吾人の浮気なることは、大文学の吾人より出でざる一大理由なり」と。

内村の批判の目差しは、明治という時代を差し貫いて、現代にまで達しているのではないだろうか。その内村の文章を安価に求められる本が絶版のままというのは、何とも惜しい気がする。(本学教員)

図書館掲示にご注目を

後期に入ってから、図書館掲示板の一角に「読書情報」として、新聞記事などから抜き出した読書にまつわる話題を提供しています。題材はかなり自由にえらび読書エッセイなども入ります。ご利用下さい。

クリスマス三題

クリスマスの思い出

ジョイ・ウィリアムズ

アメリカ人がどのようにクリスマスを祝うか、たずねられる度に、どう答えるか迷わなかったためがありません。クリスマスはヨーロッパからの移民が持ち込んだ祝日ですから、その家族の出身によって独特のクリスマスを祝うやり方があります。これらの習慣は通例、イギリス、ドイツ、イタリア、スウェーデンなどから渡ってきた古い世代から伝えられた伝統を反映しています。したがってアメリカのクリスマスはいくつかの習慣の奇妙な混じり合いですし、もちろんクリスマスを全く祝わないアメリカ人も多いのです。

また私の場合は、幼時の大半を日本で過ごしましたから、私の体験を典型的なアメリカのクリスマスとも言えないわけです。私どもは仙台で荒れ果てた大きな洋館に住んでおりましたが、それは戦前東北大学の教授を勤めたドイツ人が建てたものです。母は、木の床とガタビシする窓のあるその家を、大きすぎるため寒くて住みにくいとよくこぼしていました。しかしクリスマス・シーズンになりますと、その家の雰囲気は申し分のないものでした。大きな居間の窓の前にはクリスマス・ツリーがきらめき、電球が張りわたされた玄関のドアには新しい青々としたクリスマス・リースがかけられました。少なくとも私の記憶の中では、わが家は「伝統的な」アメリカのクリスマスの情景そのものだったのです。

第二次世界大戦が終わってからまもない当時の日本では、クリスマスは少々なじみのうすい「異国の」祝日でした。クリスマス・ツリーなどこの家にもありませんし、プレゼントを贈るぜいたくも多くの人の手に余ることでした。クッキーやケーキといった甘いものでさえまされたのですから。両親は二人とも大学で教えていましたから、いつもささやかな「クリスマス気分」を学生たちと分かち合いたがりました。学生たちには初体験となるにちがいありませんから。

クリスマスに至る数週間というものはてんやわんやでした。台所にはクリスマス・クッキーを焼く香りが立ちこめ、台所のレンジにはいつも香り高い香料入り紅茶のポットがかかっていました。くる日もくる日も、別々の学生グループがその年のクリスマス・パーティにやってきます。大きな古家はこの行事にはもってこいでした。母は、クッキーを出し、香料入り紅茶のマグを回し、学生たちはクリスマス・キャロルを歌ったものです。

これら一切に対する子どもの気持は複雑でした。母がクリスマス・デコレーション一式を取り出し、あたり一面ろうそくや電球を飾り、家がとてもあたたかく魅力的に見えますと、心が浮き立ちました。やってきた学生たちは妹たちや私をちやほやしてくれ、もちろん私たちは構ってもらって有頂天でした。長女でしたので、私の役はクッキーや紅茶の給仕を手伝うことで、それが終るといつも二階に上げられて、階下から漂ってくるキャロルの歌声を聞きながら宿題をしたり、就寝の支度をしたものです。

けれども、そんなに多くのグループがわが家にやってくるのはうんざりもさせられます。両親が学生の集まりの用意ができるようにと、わが家の夕食はせきたてられます。時には、やや身勝手なことですが、両親には家族の時間はどうでもいいのだ、と不機嫌に思いました。母はよく、あんまり忙しいので家族のクリスマスの支度はできません、と言っておりました。で、「お正月」が両親ともにやっと息が抜ける時になりました。

皮肉なことに現在の日本では、日本人の友人がよく言うことですが、今やクリスマスと新年の両方を祝わなければならないので、この時季の暮らしはてんてこ舞いなのです。至るところで店がクリスマス音楽をがんがん鳴らし、人々はプラスチックのツリーを飾り、ケーキを注文し、クリスマス・イブをどう過すか悩みます。さて12月25日が過ぎると、大急ぎでデコレーションを片付けないと新年の準備が始められません。家はくまなく掃除し、年賀状を書き、お正月用の特別料理をととのえなければなりません。そしてもちろんのこと、誰もが出席する「忘年会」を欠かすことができません。

私は日本におけるクリスマスの受け入れ方、とりわけあらゆる商業主義的な金ピカをともなった受け入れ方、をおかしいと思います。この多忙なクリスマス休みには、どのように祝うかにかかわりなく、過ぎ行く年をかえりみ、近づく新年に思いを馳せる静かな時間を見つけることがおそらく大事なことでしょう。このストレスに悩まされることの多い憂うつな時季に当たって、常緑の枝で作られたクリスマス・リース（実際はローマ時代からの伝統）、松の枝で作られた門松のいずれもが、不朽の生命と来たるべき春の兆しを象徴するものであることに思い至ると、心が慰さめられます。（本学教員。翻訳は浅野幸穂）

ウィリアムズ先生の原文（英文）コピーを希望者に差し上げます。

フランス語でクリスマスを《No 1》というが、その語源は、ラテン語の《Natalis (dies)》すなわち「誕生(日)」だと考えられている。詩人ランボーが、「朝」(『地獄の一季節』所収)の中で、「地上の No 1」によって「新しい世界の誕生」を暗示したのは、そのためである。

フランスにおいては、4世紀頃からクリスマスを12月25日に祝う習慣が定着した。クリスマスは、わけでもカトリックの祝祭であった。かつては12月24日に3度のミサが行われていたが、今日では、「真夜中のミサ」(実際には夜の10時から11時頃)だけが残るのみである。しかし人々は、ジングルベルなどの流行歌ではなく、今でも伝統的な歌を歌い継いでいる。

幼な子イエスが生まれた
オーボエを奏でよ、ミュゼットを響かせよ
幼な子イエスが生まれた
その到来を皆で歌おう

クリスマスが近づくと、留学中に聞いた一言を思い出す。もう20年ちかく前のことだが...。外国人留学生たちが中心になって、大勢で賑やかにパーティーを始めようとしていた時、隣でフランス人のCがぼつりと呟いた、「友人たちとクリスマスを祝うなんて寂しい。クリスマスは、家族で祝うもの。」

事実、現在のフランスにおけるクリスマスは、家族の祝祭に他ならない。この時ばかりは、独立心の強いフランス人たちも成人した子供たちでさえ里帰りをする。(両親が遠くに住んでいる訳でもないのに、帰らないフランス人は、恐らく何か深刻な家庭問題を抱えている。)居間にはクリスマス・ツリーとクレーシュ(馬小屋でのキリスト誕生の場面を再現した模型)が飾られ、家族揃って摂る伝統的な食事《reveillon》主菜は、栗入りの七面鳥、《buche》(薪をかたどったケーキ)等、一年で最も豪華な食事は、夜半過ぎまで4~5時間も続く。翌日には、勿論プレゼントの交換が行われる。

同時に、クリスマスは、夏休みと並んで、現代のフランスにおける最も重要な社会行事でもある。ただし、都市は、(フランス人が消え去り、旅行者ばかりが目立つ)8月には閑散としているのに対して、12月には美しく飾り立てられ、(我が国のように酔っぱらいが溢れる街のかしましさはなく)静謐で厳かな華やかさを見せてくれる。
(本学教員)

クリスマスというとキリストの生誕となるが、クリスマスツリーの起源はキリスト生誕とは少し違うものようだ。クリスマスツリーの起源は、実はキリスト教の成立以前に求めることが出来る、という。

古来、欧州ではモミの木は神聖な木として民間信仰の対象とされてきた。古代ローマではモミ材の船を建造したため、この木を海神ネプチューン(ギリシャ神話のポセイドンにあたる)に捧げたという。内陸のゲルマン民族は、四季を通じて緑の葉を付けるモミを、「闇」と「死」と「寒さ」の支配する冬の森にあって、「希望」と「堅実さ」の象徴として崇拝した。ドイツ中部の山岳地帯では、モミの木に住む小人が木に留まり村に良事を為すという信仰から、花や卵、蠟燭の明かりなどをこの木に飾りその周囲を踊りまわる祭があった。これがクリスマスツリーの起源と考えられている。

アメリカのクリスマスツリーの飾り付けについて、次のような話をインターネットで拾った。その人はアメリカのピッツバーグに滞在している日本の会社員で、同地のクリスマスイブは、友人のほとんどが実家に帰っており、日本のお正月のような感じだという。クリスマスツリーは一般家庭でも日本と同じように飾り付けをするが、日本と違うところは天使の人形の飾り付けをすることだという。起源といい、天使の飾り付けといい、クリスマスツリーもいろいろとあってなかなか奥が深い。

クリスマスと言えばすぐに思い出す小説がある。O・ヘンリーの小説で「賢者の贈り物」という短編だ。クリスマスプレゼントにまつわる美しい話なのでご存じの方も多だろう。図書館においても岩波文庫版で読むことが出来る。ストーリーは、主人公の夫が何よりも大切にしていた時計を売って妻のために豪華な櫛をプレゼントしようとする。妻は妻で自分の髪の毛を売って夫に時計の鎖をプレゼントしようとする。互いにクリスマスにプレゼントを交換しようとするが、それぞれ時計と髪の毛を売ってしまった後なので結局無駄になってしまう。しかし、何よりも相手への思いやりが最も貴い贈り物となる、という心温まる話だ。クリスマスになるとなぜかこの話を思い出す。

この他にも、クリスマスにまつわる話はいろいろある。ディケンズのクリスマスキャロルなどもおもしろい。クリスマスのちょっとした時間に文庫本を紐解いてみる。こんなクリスマスもなかなかいいのではないだろうか。
(本学職員)

ブルフィンチ「ギリシャ・ローマ神話」、「オー・ヘンリー傑作選」岩波文庫、チャールズ・ディケンズ「クリスマス・ブック」ちくま文庫。

研究ノート

イタリア・ルネサンスの公女ルクレツィア 95K092 菅谷 雅子

イタリア・ルネサンスは、芸術や文化の復興の時代、「世界と人間の発見」の時代と云われるが、また専制君主同士の対立抗争が最も激しい波乱の時代でもあった。ここでは、その渦中を生きた貴族の美姫、ルクレツィア・ボルジアという女性を紹介したい。

ルクレツィアは 1480 年、悪名高いイタリア貴族ボルジア家の長女として生まれ、野心家の父、教皇アレクサンデル6世と兄、チェーザレ・ボルジアに、イタリア統一の為の道具として利用される半生を送った。

初婚は 12 歳の時、ミラノのスフォルツァ家へ政略結婚という形で嫁いだ。イタリアは当時いくつもの群小国家に分かれ、相対立していたが、ミラノもその一つであった。しかし政治情勢の変化により、その結婚はやがて白紙に戻される。第二の夫はやはり政略からナポリのアラゴン家のアルフォンソが選ばれた。しかし、ボルジア家にとって、ナポリとの関係が不要になると、兄チェーザレによって夫のアルフォンソが殺害される。そして第三の結婚が決まる。ボルジア家は単独イタリア征服実現の為に、大公国フェラーラとの結びつきを計り、フェラーラ公アルフォンソ・デステを選んだ。この頃ボルジア家は、中部イタリアの大部分を陥落させ、中部国家の建設を目前にしていたのである。しかし、ここに至って突然、父アレクサンデル6世の急死によりボルジア家の運命は急変し、以後没落の一途を辿る。

一方ルクレツィアは政略から解放され、フェラーラ大公夫人として数々の慈善事業を行ない、国事に当たり、また多くの芸術家、学者等のパトロンを務め、夫婦の宮廷は華麗さで名を馳せた。

ルクレツィアは、「哀れな権謀術数の犠牲」と云われているように、男性諸侯の思惑や、策略に流されて生きる、当時の典型的な貴族の女性の一人と云える。この背後には、中世のカトリック的女性軽視の一端を見ることができる。しかしその一方で、彼女は自ら学芸を身に付け、また学芸のパトロンとして、ルネサンスの発展に貢献した。ルネサンスは、中世の特徴をひきずりながらも、女性にとって新しい可能性を開いた時代と云えるだろう。

参考文献

- ・マリオン・ジョンソン「ボルジア家」 中公文庫 1987。
- ・エーリカ・ウィツ「中世都市の女たち」 講談社 1993。
- ・森田鉄郎「中世イタリアの経済と社会 ルネサンスの背景」 山川出版社 1987。

関連する読みもの：

塩野七生「ルネサンスの女たち」中公文庫、同「チェーザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷」新潮文庫。

新着図書

総記・全集

藤野幸雄「アメリカ議会図書館 世界最大の情報センター」 「家永三郎集 10・13」 「福田歓一著作集 10」 「丸山眞男座談 3・8」 北岡誠司「パフチン 対話とカーニヴァル」 「福田陸太郎著作集 2・3」 川崎修「アレント 公共性の復権」

哲学・宗教

M・ブラング「東京の白い天使 近代日本の社会改革に尽くした女性宣教師キャロライン・マクドナルド」 「プラトン全集 7・8」 C・S・エヴァンス他「宗教と倫理 キェルケゴールにおける実存の言語性」 「カール・バルト著作集 1・5～11・15・17」 月本昭男他訳「旧約聖書 13」 J・ダニエル他「カトリック 過去と未来」 「トマス・アクィナス神学大全 12」 「ダライ・ラマ、イエスを語る」 イソクラテス「西洋古典叢書 14 弁論集 1」 「日本基督教団史資料集 4 日本基督教団の形成（1954～1968年）」

Boller, Paul F. Jr., *The American Board and the Doshisha, 1875-1900.*

歴史

太平洋戦争研究会「図説 第二次世界大戦」 百瀬宏他「新版世界各国史 21 北欧史」 秦郁彦「昭和史の謎を追う 上下」 司馬遼太郎「『昭和』という国家」 宮崎学「不逞者」 歴史科学協議会編「『日本ファシズム』論」 児玉幸多監修「長崎県の歴史」 阿部謹也「物語ドイツの歴史 ドイツのとは何か」 藤沢道郎「物語イタリアの歴史 解体から統一まで」 猿谷要「物語アメリカの歴史 超大国の行方」 小池滋「もうひとつのイギリス史 野と町の物語」 賀来弓月「インド現代史 独立五〇年を検証する」 「ヴァイツェッカー回想録」 ロバート・ベン・ウォレン「南北戦争の遺産」 福井憲彦他編「岩波講座世界歴史 18・22」 黒板勝美編「新訂増補国史大系 7・35・39・40」 「図説大百科世界の地理 3・7・18」

吉村作治編「アーキオ4」 宮崎市定「東西交渉史論」 加藤祐三他「世界の歴史 25 アジアと欧米経済」 「女と男の時空」編纂委員会編「年表・女と男の日本史」 松本健一「日本の近代1 開国・維新 1853-1871」

社会科学

原尻英樹「『在日』としてのコリアン」 ハワード・B・ショーンバーガー「占領 1945-1952 戦後日本をつくりあげた8人のアメリカ人」 マーク・T・オア「占領下日本の教育改革政策 戦後日本教育改革のドキュメント」 日本銀行国際局編「日本経済を中心とする国際比較統計第35号」

川出敏裕他「岩波講座現代の法6」 板谷利加子「御直披」 佐伯胖他編「岩波講座現代の教育7・10」 鴨武彦他編「リーディングス国際政治経済システム1・3」 櫻井美紀「日本児童文化史叢書20」 矢野憲一「杖(つえ)」 藤井隆至編「経済思想 日本史小百科<近代>」 飛田茂雄「アメリカ合衆国憲法を英文で読む 国民の権利はどう守られてきたか」 野村正實「雇用不安」

沖浦和光「瀬戸内の民俗誌 海民史の深層をたずねて」 芦部信喜他編「岩波コンパクト六法平成11(1999)年版」 武田龍夫「北欧の外交 戦う小国の相克と現実」 トマス・モア「ユートピア 改訂版」 朝倉治彦編「明治官制辞典」 「柳田國男全集6」 千早正隆「日本海軍の戦略発想 敗戦直後の痛恨の反省」 宇沢弘文「日本の教育を考える」 日本近代教育史料研究会編「教育刷新委員会・教育刷新審議会会議録13」 石黒一憲「シリーズ現代の経済 法と経済」 鈴木覚馬「柳田國男の本棚 27~31」 田中隆吉「日本軍閥暗闘史」 A・トフラー「パワーシフト1・2

21世紀へと変容する知識と富と暴力」 金森久雄編「経済学基本用語辞典 経済学入門シリーズ」 平和・安全保障研究所編「アジアの安全保障 1998 - 1999」 四手井綱英「森林」 外務省外務報道官監修「国連職員への道 増補版 現職スタッフによる応募から採用までのアドバイス」 IMF Statistics Department, *International Financial Statistics Yearbook, Vol.50, 1998.*

自然科学

野本陽代「宇宙の果てにせまる」

技術・工学

阿部泰隆他編「環境法 第2版」 小島覚「人類の繁栄と地球環境 現代文明はこのままでよいのか」 村井純「インターネット 次世代への扉」 武内和彦他編「岩波講座地球環境学8」 紀平英作「歴史としての核時代」

産業

日本貿易振興会編「世界と日本の貿易 1998 ジェトロ白書・貿易編」 東銀リサーチインターナショナル「貿易為替用語辞典」

芸術

鳥越文蔵他編「岩波講座歌舞伎・文楽4」 角井博監修「故宮博物院 11 明・清の書」 高階秀爾他編「西洋美術史ハンドブック」 野口榮子監修「ヨーロッパ美術史」 山内久明他「ヨーロッパ・ロマン主義を読み直す」 ジョン・マコーミック「地球環境運動全史」 鈴木杜幾子「フランス絵画の『近代』 シャルダンからマネまで」

語学

加藤宏監修「ドイツ語新正書法ルールブック」 田島松二他編「わが国における英語学研究文献書誌 1990 - 1996」 新村出編「広辞苑 第5版」 有田潤「ドイツ語学講座1~6」

文学

赤井英和「英和辞典」 「サド全集9」 「世界の詩シリーズ74 井上靖詩集」 「アメリカ名詩選 アメリカ先住民からホイットマンへ」 レイモンド・フェダマン「ワシントン広場で微笑んである愛の物語」 ヘンリー・ベストン「ケープコッドの海辺に暮らして 大いなる浜辺における一年間の生活」 早乙女勝元「戦争を語りつくす 女たちの証言」 「吉川幸次郎全集13」 亀井俊介「アメリカ文学史講義2」 「坂口安吾全集9」 司馬遼太郎「歴史の中の日本 改訂版」 ユン・チアン「ワイルド・スワン 上中下」 横山邦治他校注「新日本古典文学大系 87 開巻驚奇侠客伝」

The Works of Katherine Mansfield, 1~13; The Works of John Galsworthy, 1~30; Vidal, Gore, 1876: A Novel; The Works of James Joyce, 1~6; The Works of Walter Pater, 1~11; Kraus Reprint Co., Pagany, 1~3.

寄贈図書

総記・全集

浅田みか子編「浅田榮次追懐録 復刻版」 Mathews, Mitford M. ed., *A Dictionary of Americanisms: On Historical Principles.*

宗教・哲学

手島郁郎「日本民族と原始福音」 同「聖霊の愛」 同「老いゆけよ、我と共に」 同「人生の詩篇」 「求道者寺田博1」 長尾雅人他監修「大乘仏典1~15」 「日本基督教団那覇中央教会創立百周年記念誌」 石川政秀「沖縄キリスト教史 排除と容認の軌跡」

Phillips, J. B., *Letters to Young Churches: A Translation of the New Testament Epistles*; Goodspeed, Edgar J., *How to Read the Bible*; Phillips, F. B., *The Gospels.*

歴史

明治学院人物列伝研究会編「明治学院人物列伝 近代日本のもうひとつの道」

社会科学

「新潟工業短期大学 30 周年記念誌」 小倉襄二
他編「老後保障を学ぶ人のために」

自然科学

Doi, Takeo M.D., *The Anatomy of Dependence*.

芸術

Munsterberg, Hugo, *The Arts of Japan: An Illustrated History*.

語学

Levin, Gerald, *A Brief Handbook of Rhetoric*;
Evans, Bergen, *A Dictionary of Contemporary American Usage*.

文学

Lincoln, Abraham, *The Prairie Years 1; do, The War Years 2; do, The War Years 3*; Crane, Stephen, *Stephen Crane: An Omnibus*;
Eisenhower, Dwight D., *At Ease: Stories I Tell to Friends*;
Sideman, Belle Becker, *The World's Best Fairy Tales*;
Lattimore, Richmond, *The Iliad of Homer*;
Friar, Kimon, *The Odyssey. A Modern Sequel*;
Keene, Donald, *Japanese Literature: An Introduction for Western Readers*;
Michener, James A., *Sayonara*;
Jahnn, Hans Henny, *Werke und Tagebucher, Band 1 ~ 7*;
Rebhuhn, Werner, *Ro ro ro lexikon, 1 ~ 9*;
Thibaudet, Albert, *Histoire de la literature francaise de 1789 a nos jours*;
Durrenmatt, Friedrich, *Das Versprechen; do, Die Stadt*;
Handke, Peter, *Prosa Gedichte Theaterstucke Horspiel Aufsätze*;
Zollinger, Albin, *Gesammelte Werke, Band 1 · 2 · 4*;
Benn, Gottfried, *Gesammelte werke, 1 ~ 8*;
Pongs, Hermann, *Im Umbruch der Zeit: Das Romanschaffen der Gegenwart*;
Langgasser, Elisabeth, *Das Unausloschliche Siegel: Roman*;
Gaada, Carlo Emilio, *Die grassliche Bescherung in der Via Merulana*;
Kraft, Werner, *Carl Gustav Jochmann und sein Kreis*;
Arnold, Heins Ludwig, *Geschichte der deutschen Literatur aus Methoden, Band 1 · 2*;
Kraus, Karl, *Die dritte Walpurgisnacht; do, Die Sprache; do, Beim Wort genommen; do, Die letzten Tage der Menschheit; do, Literatur und Luge; do, Worte in Versen; do, Untergang der Welt durch Schwarze Magie; do, Sittlichkeit und Kriminalitat; do, Die Chinesische Mauer; do, Weltgericht*;
Tucholsky, Kurt, *Gesammelte Werke, 1 ~ 10*.

積もり積もって 50 万円!

学生諸君から受け取った延滞料が開学から昨年度までの7年間で¥506,000になりましたので、今年度図書費に繰り入れ図書を購入しました。

念のため：図書館としては本当は延滞料収入はゼロにしたいのです。返却期日を守りましょう。

事務室の窓から

敬和学園大学のキャンパスは12月に入る頃から彩りを増す。学内のあちこちに設けられた、多くは至って簡素なものであるが、クリスマス・ツリーが短い冬の日が落ちる頃、ポツと淡く周りを照らし出し、独特の雰囲気をかもし出す。いつもは殺風景になりがちな学校という空間がうらおいをもって立ち現われる。

今年も本号はクリスマス号ということにして、クリスマスにまつわるお話を三人の方々に語っていただいた。新奇なファッションを追う戦後の日本人がきずき上げた「風俗としてのクリスマス」に反発していた者にとっては、真のクリスマスとは何かを教えていただく心地がする。

菅谷論文は、岩倉ゼミでの勉強の成果の一端である。ゼミそのほか学内活動のなかで生まれたいろいろの成果があとに続くことを期待する。

今年も多事多端であった。とりわけ世紀末近い世界や日本の状況を見る時、変化はただに激しいばかりでなく霧の中のような不透明さを伴って人を不安にする。そこから、しばらく続いた平穩の条件が崩れ、当たり前と見られてきた多くのものに、これまでの人類の文化や思想の蓄積を用いて光を当て直す作業のころみも始まっている。永野論文が内村鑑三の小冊子に

「日本に文学なし」という重要な指摘を見出したのもその延長線上にあるのであろう。

図書館も持てるものを使ってサービス強化に努めています。掲示による広報や、レファレンスの試行もそのひとつです。歩く人が多くなって来たらん年にはより広い道となりますように。

(A S)